

大隅教授における「理論と実践」の問題

—その思考方法との関連において—

西 田 毅

時間のたつのは早いもので、大隅先生がお亡くなりになって今日はちょうど一ヶ月めになります*が、私にはいまでも、先生の計報に接したときのあの驚きと憐憫のいりまじった一種たえがたい気持がつい昨日のこのように思い出されます。

数日前に教務主任の方から大隅さんの業績紹介の依頼を受けた時、何気なく、といつては不真面目にきこえますが、それほど心のつかえを意識せずにごく気軽な気持でお引き受けしたのですが、準備をかさねていくうちにだんだんと自分の軽率さがくやまれてまいりました。と申しますのは、時間的にいって大隅さんの急逝によってうけた衝撃からまだ十分立ちなおれない状態にあるため「ニヒテルン醒めた」観察ができないということ、それに、大隅さんと私は同じ政治学専攻であります、政治史、とくに近代中国史が御専門であった氏の学問的業績を、思想史専攻の、それもまだほんのかケダシの私のはたして納得のいくようにやれるかどうか、さらに、専門がちがうだけでなく最近の方法についても若干のへだたりを意識しておりましたので、個々の論文の内容分析や系統だった学説紹介はどうてい自信をもって

できそうにない、と判断したからなのでございます。

それで、追悼のことばならともかく、御専門の業績紹介については、しかるべき中国史研究の方にお願ひして私は御辞退しようかと一時は真険に思案したのでありますが、しかし、落ちついて大隅さんの死を考える余裕ができてまいりますと、生前の大隅さんと私のまじわりからいって、多少大仰な表現をすれば、たとい不十分でも大隅さんの思想と学問の一端を紹介すべき義務感のようなものを覚えるにいたつたのであります。

私事に及んで恐縮ですが、七年後輩の私は大隅先生に単に学問の世界で親しくしていただいたというだけでなく、日常の瑣事についてもいろいろ示唆に富むアドバイスをうけておりました。さいわいなことに私は議論のできる友人や先輩に比較的めぐまれていた方ですが、しかし、世界観にかゝるような問題まで「肝胆相照」らして語りあえる人や、発言の行方や効果を気にかけることなく生地きじを出しあつて議論できる人は、求めてもそう簡単には得られないものです。このようなわけで、大隅さんは日頃私の心像に大きな座を占めていただけに、氏の突然の逝去はポツカリあいた空洞のようで、しかも、それは時間とともにますます大きな深淵になって、私の心を寂寥と哀惜の谷間にひきずりこむのです。

最後にお会いしたのは十一月三日ですが、午後から病院に御見舞にいつときは思ひのほか御元氣そうで血色もいようにおみうけしました。すぐに失礼するつもりでおりましたが、夏以来三ヶ月ぶりとあつてつい夕食が運ばれてくる頃まで話しこんでしまったのですが、そのときのお話しぶりや雰囲気からは、とうてい今日の不幸を予想することはできませんでした。最近出版された書物や論文のことから病氣回復後の講義のこと（ちなみに、今年から政治史Ⅱの講義がはじまった）、基礎演習のあり方、将来の法学部の構想等、実に活発に「新生活」の抱負を語っておられ

たようでした。もちろん、数日後にせまった手術に対して一点の疑念や不安も感じておられなかった、といつては偽りになるでしょうが——事実、ときどきふつと暗いカゲがよぎることがありました——たまたま話ができることにふれたとき、手術に成功した人のいくつかの実例をだされて、「自分のは軽い方だし手術前に慎重な検査を重ねるから心配はないと思う、それに私も社会学者を認めている以上、医師の科学的説明に従うほかないでしょう」といつておられたのです。それが我々によけいな心配をかけたくないという配慮にでたものか、御自身を上げます言葉であったのか、不覚にもその意図にまで注意が及びませんでした。とにかく、予想外のあかると屈託のなさを見出して、私は内心ホッとしていたのであります。

心臓手術が現代医学の水準ではまだまだ危険であることは百も承知の上で、あえて手術を決意なさったのは、日々の病いと闘いの苦しさもさることながら、健康な身体を獲得することが、自らの学問と思想の奥深くにひそむ「ネガティブな限界」（氏の言葉）を打ち破る基本的な途であることを確信され、その可能性を一日も早く顕在化せしめたという気持、いかえれば、「体質改善」の夢を託すことによって、手術に対する不安とまよいを払拭しておられたのではないか、今にしておもえば、そこに当時の大隅さんの明るさとおちつき之源があったように思われるのであります。ですから、それは、無知からくるやすらぎとは自らがう、幾多の苦悩と試練を経て到達した精神的平安の境地であり、その根柢には「三十五才を境にして生まれかわりたい」ともらしておられた言葉に象徴されているような、執刀医のメスに自らの「蘇生」を賭ける、というつきつめた感情があったのではないのでしょうか。

死を前にした人には、応々にして、自らの死を静かに受けとめる心のゆとりや生死に対する無頓着さがみうけられるものですが、大隅さんの場合そんなものがあるはずがなく、むしろ、なまなましいまでの生への執着が片々たる

会話のハンバンにまでほとぼしりしていたのを記憶しております。

しかし、結果は大隅さんの期待と全く反対の事態が起ったわけで、「賭け」はとりかえしのつかない失敗に終わってしまったのです。これは単なる感傷にすぎませんが、こんなことになるのであれば手術を断念されるようももっと強くおすゝめした方がよかつたのではないか、たとい長からぬ余命であっても、その方が御気持の上でも、御仕事の点でも整理というか一応の区切りをつけることができたのではないか、治ることを信じて手術台に上られただけによけいに痛ましく感じられ、未練がましい気持があとから湧き上ってくるのを容易に断ち切ることができないのですが、ここでいたづらに拙ない感傷的な言葉をつらねるのが今日の私の任ではありませんので、そろそろこのへんで本題に入ることにいたします。

二

前おきが長くなりましたが、はじめに紹介の仕方について一言、お断わりしておきたいと思えます。最初に申しのべましたように、ここでは個々の論文の内容を紹介するのではなく、氏の学説乃至思想の中からアトランダムにいくつかのポイントをとりあげそれを主として方法及び学問的モチーフと関連させながらお話してみたいと思います。

大隅さんの知的関心は非常に多岐にわたっておりまして、専門の政治学の他、文学・哲学・歴史等にも造詣がありました。一応活字の世界にあらわれたものに限定していえば、ごく大雑把にいつて次の三つの関心方向をあげることができるといえます。

第一は政治学の基礎理論といえますか原理に関する問題、第二は御専門の中国政治史研究であります。そうして、

この二つの研究主題はバラバラに「並在」(nebeneinander) しているのではなく氏の問題意識において緊密に結びついている。つまり一般史 (General History) のなかに解消されない政治史というか歴史学における政治史のジャンルの自立の必要を力説しておられた大隅さんにとって、政治学上のカテゴリーや基礎的諸問題の研究は政治史研究に必須な課題として認識せられていたのです。

第一の分野に属する著述には、「権力の概念規定について」(「同志社法学」二十九号)、「圧力集団の概念——トルーマンを中心として——」(「政治学会年報」一九五九年度)及び「社会主義的政治範疇としての『民主主義と自由』について」(「同志社法学」七十八号)等があり、第二に属するものには「中国・新民主主義政治論」(修士論文)、「太平洋——中国民主革命序曲——」(「同志社法学」三十八号)、「戊戌百日維新」(同大人文学研究所「紀要」創刊号)、「辛亥革命」(「政治学会年報」一九六四年度)等があげられるでしょう。それから第三番目は、世界観(方法)としての弁証法的唯物論の研究です。それは「同志社法学」に掲載された多くの翻訳にみることができですが、内容は主に中国の学者や思想家の哲学乃至認識論に関するもので、たとえば李光燦・郭雲鵬「孫中山の哲学思想」、肖前「条件を論ず」、吳傳啓「政治と経済の弁証法」、舒煒光「基本的な矛盾と矛盾の基本的な側面について」等々、実に勢力的な翻訳活動が展開せられているのであります。

それでは、これらの各領域を貫流する基本的な問題意識乃至学問的動機はいったい何なのでしょいか。

大隅さんの学問的出発点である修士論文は、昭和二十九年に提出されましたが、そこには、その後一〇年の研究を方向づけ内面的に規制したいくつかの命題が萌芽的にあらわれております。「中国・新民主主義政治論」と題する修士論文は、全部で五章からなっており(第一章中国新民主主義革命、第二章中華人民共和国の国体、第三章中華人民

共和国の政体、第四章中華人民共和国の選挙制度、第五章新しい中国政治の現代的意義）、中国革命の基本的な性格と意義が説かれているのであります。章の構成からもおわかりのように、それは修士論文という性格もあって新中国の紹介的論文の域をでませんが、中国革命を対外的には独立と民族の解放とし対内的には人民の解放という、いわばナショナリズムとデモクラシーの二つの原理の均衡として特徴づけ、さらに共産主義中国を生みだした民族的エネルギーの源を歴史的に究明しようとする姿勢が鮮明に打ち出されています。事実、この問題意識が大隅さんの一貫した研究テーマとなってあらわれているのであります（「太平天国—中国民主革命序曲—」、「戊戌百日維新」、「興中会から同盟会の成立に至る政治過程—辛亥革命への序曲—」など）。それから、先にあげた弁証法的唯物論の研究も、中国の生誕を可能にした中国人民の民族的エネルギーを涵養し方向づけたイデオロギーの研究として、一連の事実史研究と関連づけられそれらの各々が氏の仕事の系列の中で明確に位置づけられているのであります。

大隅さんは、中国革命の勝利をまさに「アジアにおける植民地、半植民地諸国の人民大衆に対し、民族の独立と解放を可能性の領域から、現実の領域へと実現せしめた」ものであるとして高く評価し、この革命を準備した諸々の契機をあきらかにすることは、とりもなおさずわれわれの国の変革の論理を導き出すという実践的課題にそう作業である、という認識をもっておられたようであります。

ここに、氏の思想を考える際に看過できないポイントである、「理論と実践の統一」という命題がでてくるのであります。

中国政治史研究の根柢には、革命、つまり「日本における社会主義への道」の理論的追求といういわば超学問的な動機があったのであります。ただ私は、大隅さんがなぜ範疇的にはブルジョワ革命に属する「中国新民主主義革命」

を研究テーマに選ばれたのか、研究の強調点も現代中国の政治制度やプロレタリア革命の原理的な問題よりもどちらかといえば、新中国を準備したいくつかの近代革命の研究（たとえば五・四運動や清末の近代化運動など）におかれているのですが、そこに私は、氏のある目的意識を感じるのです。御承知のように日本と中国は、十九世紀後半にインタナショナルな世界（西洋諸国）との接触によって、「開国」という問題が大きな政治的争点になりました。衝撃に対処する仕方や「近代化」のプロセスにおいては、彼我、相当なちがいがありますが、とにかく「後進国」として、歴史的共感をわかちあった中国の近代化運動をとりあげたということが、先にふれた日本の変革という基本前提との間に論理的な脈絡があるのではないか、「ある目的意識」とはこのことでもあります。

中国革命が戦後日本のインテリ、ことに青年学徒に与えた影響は相当なものだろうと思いますが、私の関心は、そういう熱っぽい当時の客観状況がテーマ選択との関連において若い大隅さんにどのような形で投影したかという、状況と人間の関係という問題よりもむしろ個人の内面の次元で、つまり大隅さんの体内でまだ凝固しないドロドロしたナマの生活意識がどういう契機とプロセスを通過して研究主題という抽象度の高い知的意識にまで昇華していったのか、というところにあるのです。

さて、大隅さんを考えるもう一つの指標に、世界観としてのマルクシズムの問題があります。

氏のマルクシズム理解がどの程度の深さをもっていたのかということには私にはわかりません。元来、哲学専攻でない大隅さんの弁証法理解についてあれこれ立ちいった「詮索」をする気持はありませんが、氏の思想形成とマルクシズムの関係、具体的にいいいますと、氏が何故青年時代の実存主義的な世界観からマルクシズムに接近していかれたのか、そのいきさつを思想「遍歴」の問題として扱うのではなくして、「観念論」から「唯物論」への転移が、どのよ

うな新らしい展望と可能性を氏にもたらしめたのか、いわば、思想と人間という観点にたって検討してみたらおもしろいのではないか、そういうつもりで申しあげているのであります。

三

大隅さんとお話していつも感じますことは、思考方法において、氏は原理に忠実な方である、ということでもあります。大隅さんは、ゾルレンの問題を重視し、つねにあるべき姿、あるべき原則から出発されるのですが、その場合、依拠すべき原則というか原理を具体的状況の中で決めていくという方法をとらず、どちらかといえばむしろ先験的なかたちで規範原理があつてそれとの照準によって事物を判断するというタイプの方であつたように思います。

福沢諭吉は「すべて世の中はゼネラル・プリンシプルをば是とすれども、これをパーチキュラル・デテールに施すに至りて注意することなし。またそのプリンシプルを施して失策あれば、その施行の悪しきを咎めずしてプリンシプルを咎むることあり」（「覚書」）といっておりますが、率直にいつて大隅さんのような思考法は一步誤まれば福沢の指摘した轍を踏む危険性があるのではないか、したがっていわゆる「状況的判断」というか *situational thinking* は氏の思惟方法とは遠い距離にあつたように思うのであります。大隅さんは、よく柔軟性の美名の下に、今日の発言を明日ひるがえして平然たるインテリの無原則な状況追随主義を非難しておられました。氏の発想の硬さと「公式性」を問題にする人がありますが、そこでいわれる「硬さ」が、このようなインテリの糾弾の姿勢に通じるかぎり何ら批判の対象にならないと思うのであります。ただそれがプラス効果だけでなく、同時にマイナス効果をも生みだす要素になつていなかつたかどうか。この点を考慮に入れながら、二、三感想を申しのべたいと思います。

あれはいつのことか、日時はさだかでありませんが、なんでも夏の暑い一日、大隅さんのお家をお訪ねしたことがございます。用件は北京シムポジウムのことであつたと思うのですが、よもやま話がたまたま当時問題になつていた日本共産党のS議員除名問題におよんだときのことです。部分核停を認めるS議員とそれを認めない党の方針が対立したその事件は、どちらの主張が正しいかということもさることながら、組織と個人、乃至集団意思と個人意思の問題、またいわゆる「群の人」^{ヘルデンシン}か精神的独立の保持かというようないくつかの興味ある問題を含む事件として私の関心をそそつておりましたので、氏の考えをおききしたところ、即座にS議員を非難されたのです。その論拠は、第一にS氏の個人的態度の問題であり、第二に民主主義のルールであります。

S氏の性格的欠陥ということは、その時点では論証できない事柄ですから議論の対象にはなりえず、二番目の民主主義のルールについてかなりつっこんで語り合つたのですが、大隅さんは、党に所属しているかぎりたとい個人的に不満であつても党議にしたがうのが義務であり、それがデモクラシーだと強調されるのです。民主主義のような包括的な概念はつねに次元と局面^{レベル アスペクト}を限定して考えないと、ああもいえるがこうもいえる式の議論に陥りますから気をつけないといけないのですが、組織の拘束性^{コンストラクティブ}という点からみれば政治結社^{アソシエーション}に属する者、S議員に例をとれば、かれが党議に服さねばならないのは当然のことですから(但し決定がそれこそ民主的^{民主的}な方法によつてなされたことを前提として)義務にそむいた場合それは立派に懲戒の理由になるでしょう。ところが、党議それ自体の内容の問題になるとまたちがつた角度から考えてみる必要があるのではないか、問題を更に、より広い文脈においてとらえて意思決定の仕方や主体性に着目するとどういうことになるのか。幾多の迷いや疑問をくぐりぬけて、あくまでも自らの力で問題にあつていく主体的な個人と集団の重みに支えられた知的に懶惰な「組織の住人」とはたしてどちらが意義ある生き方な

のであろうか。

私のこのような疑問を、大隅さんは「個人の卓見よりも大衆の叡智を信じたい」というようなことばで結ばれたのですが、どうもそれでは納得のいく回答とはいえず、いささか寂寥感を覚えたことを記憶しております。

更にまた氏の敵・味方二分法的発想の特徴をあげることができません。問題は敵と味方を区別する規準なのですが率直にいったいささか独断的な感じをうけたことが一再ならずあります。

かつて、私達若い研究者の間である学者の著作を読む会を組織した際に、大隅さんにも参加を呼びかけたところ、きっぱりと断られました。その理由は、方法論のちがいにあったようで、その学者の業績は認めるが（但し一定の範囲内で、という条件が付きまゝ）かれの学問や思想活動のはたす客観的な役割は評価できない、したがって「内在的批判」の必要も感じない、それよりも、その学説の「誤り」と「危険」性を克明に衝くことの方が重要な課題である、というわけです。

大隅さんにとって、方法論のちがう人の業績は限定された意味でのメリットは認めえても、基本的には克服さるべき対象にすぎないのです。ですから、複数に存在する方法論には確固とした価値序列がつけられているのでありまして、価値的に低次の方法論は学習の対象にはならない、したがってそこには対立物（方法論のような抽象度の高い意識から生活ムードにいたるまで、凡そ意識全体を含めて）を消すという発想はあっても、対立物から学ぶ——限定付きの学習でなく対立物自体に学習の蓋然性を認める——という姿勢はないように思うのであります。

しかし、今日のように何が敵で何が味方であるか、敵味方の境界があいまいになってきている状況——これは、いわゆる「大衆化」状況の進行とも関連があると思うのですが——において、このような多分にアプリアリな二分法的

発想はどの程度有効性をもちうるのか。

だいたい敵・味方の区別というような問題は、具体的な状況との関連において緻密に判断する必要があるのではないのでしょうか。ある人を判断する場合、まづその思想やイデオロギーに着目して、そこから直線的に敵・味方のレッテルをはるのではなしに、かれがおかれたシチュエーションの中でどういう価値の選沢を行ったかということ、提出された個々の問題にどう対処し解決していったか、その方法を基準にして考えていかなければならないのじゃないか。これらの事柄を無視して「あいつの思想は客観的には敵を利するものである」とか「人民の敵」である、というような評価の仕方はあまりに抽象的すぎてどうも合点がいかないのであります。

四

先ほどからのべてきましたように、マルクシズムは大隅さんにとって単に学問の方法であっただけではなく同時に行動原理でもあったのですが、このことと関連して氏の学問観は政治的実践の問題とわがちがたく結びついております。つまり、学問は窮極的には変革の理論的指針であらねばならない、という考え方が根柢にあるのです。しかし、大隅さんの実践活動はあくまでも学問的テーゼと内面的に結びついているのでありまして、研究を放擲した活動は厳につつしんでおられた。言いかえればそれは、深い理性的反省に支えられた実践活動であった、といえるのではないかと思います。

しかし、ここでも私は若干の疑問を感じます。疑問というのは、大隅さんのマルクシズムに対する信頼度の高さが、右にのべたような積極的な面だけでなく、氏の豊かな可能性にとってかえってネガティブな要素になっていたとはい

えないかどうかということ。大隅さんのマルクス主義の正当性にたいする認識は、死の直前には信念の次元にまでたかまっていたように思うのですが、氏のそういう態度が、異なる思想や立場に対する無関心乃至敵対意識となつてあらわれたり、実証性のないオプティミスティックな歴史論、民主主義論等を構築するのに作用したのではないかと考えるのであります。

数年前に書かれた論文に「社会主義的政治範疇としての『民主主義と自由』について——中国社会主義政治の一考察——」という一文があります。それは一九五七年に発表された毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という論文の紹介、とくに「二つの種類の矛盾」に関する学説のメリットを説きながら、プロレタリア民主主義と自由の問題をとりあつかわれた論文であります。そこには氏の民主主義、自由、社会主義等についての見解が随所にちりばめられていて大隅さんの思想をうかがうに好個の資料であります。

以下思いつくままに若干のセンテンスをひろいあげてみますと、まず民主主義の基本的なとらえ方の問題であります。が、具体的に、二つの範疇（ブルジョアの民主主義とプロレタリア的民主主義）において理解すべき必要を説き、抽象的な「純粹思惟」の産物としての「一般的民主主義」観や自由観を峻拒しておられるのであります。言われる具体性とは、徹底した階級的視点の強調であり、「どの階級にとっての民主主義であり、どの階級に対する民主主義」であるか、という観点にたつてつぎのような所説が導き出されるのです。曰く、「ブルジョワ的民主主義とは」「商品所有者の『民主主義と自由』であり」「資本主義的経済に奉仕する」、ところが「階級の消滅と社会主義の建設」をその課題とするプロレタリア的民主主義は「社会主義経済に奉仕する」ものである、と。

それでは二つのデモクラシーの内容についてはどう理解しておられたのでしょうか。

ブルジョワ民主主義は「圧倒的多数を占めている勤労者に対する専政を条件とする、搾取者の民主主義であり、ブルジョワ的自由は「勤労者の不自由を代償とする、少数の搾取者の自由であって、ただ、貿易の自由と売買の自由を意味するにすぎない」が、他方、プロレタリア的民主主義及び自由は「プロレタリアートが国家権力を奪取して」「勤労者がかちとったところの真の『民主主義と自由』であって、資本の圧迫と搾取から脱却している自由」にほかならない、「プロレタリアートの民主制度は、ブルジョワジーの民主制度よりは、更に高度の民主制度であり、その本質を異にしている」、要するに「プロレタリア独裁は、勤労人民の『民主主義と自由』の最高の表現」であって「資本主義国家には、ただ資本の自由のみが存在するように、社会主義国家には、ただ、社会主義の道をまっしぐらに走駆する自由のみが存在し、反社会主義的自由の存在はゆるぎされない」と。そうしてプロレタリア独裁と社会主義的民主主義の関係について、前者は後者の保障となり後者は前者の基礎である、というように理解しておられるのであります。

ここから、「経済的土台に奉仕する」「一つの手段」（傍点筆者）としての民主主義観が導き出されるのでありまして、毛沢東の「抽象的な自由や抽象的な民主主義を要求する人びとは、民主主義を目的だと考え、民主主義が手段であることを認めない。民主主義は、時には目的であるかのようにみえるが、実際は一つの手段にすぎない」という言葉を引用して、民主主義（社会主義的プロレタリア的）を「広大な勤労大衆を国家の管理にひきつけ、大衆を教育」し、そこにおいて「人民大衆を統一し、団結し、指導するという共通の目的をもつ手段」（傍点筆者）として把握されるのであります。

大隅さんは、社会主義が資本主義よりもすぐれた社会体制である、との考え方にたっておられる——氏は社会主義

社会は「本質的に」「民主主義的でもあり、(中略)自由も規律もあり、統一的な意志も個人の気持のゆとりもある、最も民主的で最も自由な生き生きとした、そうした生活である」といっておられる——のはいうまでもないことです。が、社会主義的組織と規律及び権威や権力の問題について、更につぎのような見解をあきらかにしておられる。すなわち、社会主義政治のもとでは、「組織の規律は」「何れも人民の利益を保護し、人民の自由を保障するためのもの」で「本質的にいって、労働者間の自覚にもとづく同志的な規律である」が、「階級社会における規律は、いうまでもなく、搾取階級の規律である」と。

ところで、「集中や規律」に固有の権威や権力、その属性たる強制と服従の契機をどう考えるのか。この点について氏は「階級社会にあつては、強制と服従との間には敵対的關係が存在する」が、社会主義国家(とくに中国の場合)においては「一切の権威や権力は、すべて集团的(非個人的)なものであり、それは人民大衆から生み出され、人民と極めて密接な連けいをもつ人民自身のものである」から「人民自身がつくりだす権威と権力に対して、自らが強制せられ、それに服従する」という關係にたつ。したがって権威・強制力・権力等の問題を「相対的、条件的」に把握しておられるのであり、「ブルジョワ的権威」「ブルジョワ的規律」に対しては打破に向つて力をつくすべきであるが「プロレタリア的権威」や「規律」は擁護しなければならぬ、そうして「ブルジョワ独裁に反対し、プロレタリア独裁を擁護すること」の必要をレーニンやエンゲルスの所説をひきながら強調されるのであります。しかも、このような民主主義観の前提には、階級消滅と社会主義への移向は「社会発展の必然的な趨勢」であり、歴史の歯車を「社会主義社会へ進めること」は「プロレタリアートの歴史的使命」である、そのためには「一切のブルジョア思想、小ブルジョア思想との闘争」を経て社会主義的自覚をたかめる必要がある、という非常にアクティヴな姿勢があるの

です。

ここに紹介してまいりました大隅さんの民主主義観や社会主義のイメージ、歴史発展のとらえ方というような問題は、単に政治学のみならず哲学や社会科学全般にまたがる問題であるだけに、その一々についてたんねんに検討していくことは私の能力をはるかに越える仕事でありますから、たちいった疑問を申しのべることはひかえまして、二、三の特徴を若干のくり返しをいとわずに整理するだけにとどめたいと思いますが、たとえば民主主義の問題について、大隅さんは、民主主義は手段であって目的ではない、という考え方にたたれる。そうして、截然と区別された二つの民主主義については、「非搾取者」たるプロレタリアートの、「搾取者」たるブルジョアジーに対する実体としての優越性に基いて、プロレタリア的民主主義の優秀性が強調されるのであります。

カール・ベッカーは「民主政治の基本原則は市民が日常的な仕事を自らの力でコントロールしうることにある」(Modern Democracy)とっておりますが、このような民主主義の連続的契機というか、およそ社会主義社会にも資本主義社会にも共通の、いわば体制横断的な課題については、あまり考慮されておられません。

そうして、このように民主主義における「歴史的」乃至断続的契機を重視する態度は、氏の実体的な人民概念と緊密に結びついているのではないか、と判断するものであります。

五

大隅さんの学説と思想の一端を「紹介」するのが目的であるこのお話がすっかり批判めいた調子のもものになってしまつて恐縮ですが、じめじめした哀悼文やみえすいた御世辞で飾るより、氏の考え方に対して疑問や感想を率直にの

べさせていただいた方が論客大隅さんの追悼会にふさわしいのではなからうか、という勝手な推測のもとにお話をす
すめてまいりました。

ここで申しあげた私の大隅観は、公けの、それもごく限られた生活領域での接触によって得られたものであります
から、当然、一面的で相対的、とのそしりをまぬかれないでしょう。したがって、私のよく知らない部面に、案外氏
を正しく認識するうえでのキー・ポイントがあったのではないか、氏の思想評価の基準が正しく考慮されているかど
うかというような疑問を容易に払拭しきれないのです。「解釈とは著者以上に深く理解することである」（ディルタイ）
という言葉があります。これは含みの多いフレーズですから解釈の中が広いと思いますが、この場合、大隅さんを正
当に評価し、それこそ「本人以上に深く理解する」にはどういった点に気をつけたらいいのか、最後に、この問題につ
いて一言つけ加えたいと思います。

いったい、思想や学問は何才をもって円熟の境地に達するか、というようなことは人それぞれによって違いますか
ら一概にいえないのですが、それにしても、三十五才という年齢は学問の世界においてはまだ修業時代からやっ
と「遍歴時代」にさしかかった頃なのではないか、と思うのです。

現代のように、^{スペシャリゼーション}専門化の進化とそれによってもたらされた各分野、領域での分析や考証の深まりが逆に総合的契機
との結びつきや広汎な視野の必要性を喚起している学問状況にあって、——対象的には「あらゆる社会関係および人
間と自然の関係全般にわたらざるをえない」政治学を研究する者にとってこの要求はとくに大きい——創意に富んだ
見解を確固たる世界観にもとづいて打ちだすことは余程の価値の蓄積がないと困難なのではないでしょうか。

もっとも、大隅さんはマルクシズムに対してゆるぎない信頼を寄せておられたのですから、方法（世界観）の問題

に関するかぎり、もはや氏は「遍歴時代」にあるとはいえないのですが——しかし、逝去の時点で、すでに方法論上の迷いから解放されていたということがはたしてどのような積極的意味があるのか、ということは私には疑問として残ります——政治を概念やカテゴリーを用いて認識し抽象化する我々政治学徒の課題、つまり、既存の命題や範疇を単にフォローするだけでなく日々変動する状況に対して絶えずそれらの有効性テストを行うことによってより精緻な概念を自らのものにしていくという仕事を、どの程度やりおかせておられたかということになると大きな疑問を感じるのであります。

しかし、このように言ったからといって私はなにも大隅さんの長からぬ生涯の最後の地点における理論的成果をあれこれ批判しているわけではありません。いわば「未完成」の状態でお亡くなりになった大隅さんに、円熟した政治的思惟や完成された理論体系を要求するのは妥当性を欠くのではないか。ですから、大隅さんについて考える場合私たちは「完成された体系だけでなしに、形成途上の、いわばまだムード段階にある未発の思想をも見のがさぬように」（竹内好氏の言葉）するという配慮や、丸山真男教授の表現を借りれば、「ある思想の発端においてあるいはそれが十分に発展しきらない前の段階においてそこに含まれているいろいろの要素、それがもっているところのどっちの方角にでもいき得る可能性」（「思想史の考え方について」）に着目するという態度がとくに必要なのではないか、と思うのであります。

大隅さんが御自分の力で追求しようとして十分にやりとげることができなくなった理論的実践的諸問題をつぶさに検討して、発展・継承すべき論点を正当に評価していく、それが、故人の霊をなぐさめるせめてもの方法ではないでしょうか。そうして、また、奢侈を排し、清貧に甘んじ、蒲柳にムチ打ってただひたすらに学究の道を歩まれた大隅

さんの学問的態度は、ひろく学徒の範としていつまでも語り伝えていく義務があるのではないか、このように考える次第でございます。

附 記

※ この稿は、昨年十二月、法学会が催した故大隅逸郎教授追悼会での講演メモを訂正、加筆したものである。

追悼会以後数ヶ月を経た今日と当時とは、精神的雰囲気も異なるし、本稿を読み返してみても少なからず論旨の強調点の移動も感じられるので、いっそのこと追悼会の体裁にとらわれないで純然たる業績紹介のかたちに書き改めようかとも思い、関係著作を読み返しはじめたのであるが、それでは原稿締切の日を甚だしく超過して編集上の支障をきたすおそれがあるので断念せざるを得なかった。意に満たぬ点を残したまま発表せざるを得ないのは心苦しいが、現在の筆者の個人的事情では如何ともしがたい。この点御遺族の方をはじめ同志社法学編集委員諸氏の諒恕を請いたい。